
アナテマの母

ふみふみマツト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アナテマの母

【Nコード】

N2988Z

【作者名】

ふみふみマツト

【あらすじ】

とある辺境の農村。

少女が森の中で血塗れになって倒れ死ぬ寸前の女を救った。

その女は大怪我を負いながらも、少女の必死な救命作業の結果、奇跡的に命を取り留めた。

しかし、その意識を取り戻した女は過去の全ての記憶を失ってしまったのだ。

セリカという名前を貰った女は自分を助けた少女、ティエラに湧き上がる不思議な感情と既知感に悩み、知っているのに知らないとい

う知識の数々に困惑してしまう。

それでも彼女はティエラと過ごしていく内に村で「ティエラの母」として生きていく決意をした。

しかし、そんな絆を結んだ親子に歴史の大きな変化の渦は襲い掛かり、呑みこまんとしている。

セリカ、ティエラはその時にどうするのか？

疑似中世風厨二病ファンタジー『アナテマの母』 始まります。

プロローグ「記憶喪失」

まず、初めに感じたのは熱さ。

熱い、熱い、熱い。^{イタイ}

躰が痛い。

頭が、喉が、胸が、手が、腹が、足が、灼けるように熱い！^{イタイ}

痛みを感じる身体は鉛のように重く動かない。

目を開けているのか、開けていないのかも分からず、目の前の視界には暗闇が広がるだけ。

分からない、何でこんなに熱さ^{痛み}を私は感じている？

「……………ウ……………ガツ……………」

痛ッ！頭が割れるように痛い。

思考が纏まらない、痛みが思考を鈍らせている。

「あつ、まだ動いちゃ駄目ですよ！」

声？

何処までも響き渡るような澄んだ声。

そんな声が聞こえてきた。

「……………ウ……………ア……………アア！」

先程に僅かに動いた口を動かし、言葉を出そうとする。

しかし、激痛が躰を走り、まともな言葉が出ない。

呻く事しか今の私には出来なかった。

「大丈夫、大丈夫ですから、だから今は寝ていて下さい」

手の上に何か暖かい物が重ねられる。

その行為によつて痛みが走つたが妙に心地よい。

手を通して、温かみが全身に広がっていく。

その温かさという物が痛みと頭痛を和らげてくれている気がする。

私は動くのを止め、その温かみに体を委ねる。

声の持ち主はほつとしたような息を漏らした後、歌を歌い始めた。

「~~~~~」

聞いた事が無い歌。

しかし、どこか懐かしく感じる歌だった。

緩やかな、心が落ち着く歌。

私の意識はその歌を子守唄に再び意識を闇へと落としていった。

アナテマの母 プロローグ 「記憶喪失」

再び、意識が闇から浮上した。

前よりも痛みは和らいでいる。

起きているだけで、意識が朦朧とする激痛を味わつという程では無いらしい。

「……………ッ！」

ようやく認識出来た瞼を開けると、感じたのは白一色と痛み。

「……………ここは？」

それもやがて収まり、視界に映し出されたのは材木で出来た骨組みが見える天井だった。

それを隣にある、おそらく火で出来た光源が照らしている。

視界から得られる情報だと、これしか分からない。

雰囲気から地下という訳でも無いし、光が差し込んでいない所を見ると今は夜なのだろう。

周囲の状況を確認する為に躰を動かそうとすると、何かが扉のような物が開くパタンという音が聞こえ、誰かが走って来る音が聞こえた。

「だから、動いちゃ駄目なんですって！」

その声と同時に視界に映るのは一人の少女。

年かさは十五か、十四くらい。

長い黒髪を赤いリボンによって纏め、後ろに流している。
なぜか耳が横に長い。

そして、実に不思議な、奇妙な格好をしていた。

妙な模様がついた服を和服のように羽織っており、腰に巻いたりボンドで固定している。

……………民俗衣装？

「おか……………アナタは酷い怪我をしているんです！」

傷はまだ完全に塞がっていないし、動いたらまた開いちゃいますよ

！」

近くに座った少女を腰に手を当てて、説教をするように私に言う。
酷い怪我？そうか、だからこれほどに躰が痛むのか。
そもそもなぜ私は怪我をしている？

いや、私？

「一応、治癒呪術で治療をしたので傷は残らないと思いますけど。
その分、結構痛みはあると思うので覚悟をしておいて下さいね」

私？私？私は……ッ！？

「痛ッ！！アガッ！」

割れているのかと思うぐらいに頭が痛い！！

「大丈夫ですか！」

少し待っていて下さい、今、鎮痛薬を持ってきますから！」

霞み始めた視界から、少女は慌てたような顔をしてどこかに立ち去っていた。

激痛は頭を浮かんだ疑問を掻き消して再び、私の意識を闇の底へと戻っていった。

……………二度目。

心の中で呟きながら、再び目を開く。

そこには激痛によって、意識を落とす前と同じ光景が広がっていた。今は昼間なのか、天井がはつきりと見えている。

しっかりとした木の柱に藁ぶきの屋根。

農民の家？

それにしてもしっかりと作り上げている。

柱や梁はしっかりと建築についての知識がある者がくみ上げたような構造。

床は土を踏み固めて藁を引いた物ではなく、木で出来ている。

しかし壁が適当に藁ぶきが作っている辺り、技術力が分からない。

これ程の技術力なら土壁、石壁は勿論、漆喰や煉瓦を使ってしっかりとした物を作れそうだけど。

……とりあえず、周りを見よう。

「痛ッ……ウウ」

躰に鈍い痛みを感じたが、ゆっくりと立ち上がる。

木が軋む音を聞きながら、躰に掛かっていた白いシーツを払い落とし周りを見た。

……やはり農家だ。

そこは農家らしく、大きな部屋が一つあるのみ。

中央には今も火がパチパチと鳴っている囲炉裏があり、その上にある梁から棒がぶら下がっていて、火に当たるように鉄の鍋がかけられている。

他の場所を見ると柿のような果物が梁からぶら下げられ、干されていた。

「…………ア…………グウ…………」

痛む躰を動かさず、光が見えていた入り口から外に出る。

「う……………」

太陽の明るさに慣れた目に外の光景が広がってくる。

一面に広がる青々とした水田、あぜ道に広がる藁ぶきの家、水田に作業をする耳が長い人々。

こっちは気がついていないのか、真剣そうな顔で屈んで何かを取っている。

手を見る限りだと、雑草を取っているらしい。

時折、首に掛けたタオルらしき物で汗を拭いたりもしていた。

やはり知らない所。

でも、太陽の暖かな陽射しと躰をくすぐる穏やかな風がとても気持ちが良い。

砂利を直接踏みつけている足の裏や、日光が直接当たる皮膚にも痛みが足されたが、それでもここに居続けたいという気持ちが保てる程に気持ち良かった。

そんな風に「初めて」の外を堪能していると、急いで走りよって来る人影が見える。

「まだ、動いちゃ駄目ですって！

傷がまた、開いたらどうするんですか！」

怒った形相で駆け寄って来たのは前に私に話しかけていた少女。

「動ける程度には回復したから」

「嘘です！まだ絶対安静にしなくちゃいけない傷なんですよ！
立っているだけで激痛が走っている筈です。
お願いですから……無理はしないで下さい」

なぜか涙目になって私に懇願する少女。

確かに私が悪いか。

まだ現状が分からないが、おそらく助けて貰っている立場であり、
そんな立場の人間が自分の好きな様に動くのは問題があるだろう。

「分かった、ごめんなさい」

頭を下げて謝る。

「あ、いえ、そんな風に謝らなくても。
とりあえず、まずは家に入りましょう。

新しい包帯と代えの服を用意しますから」

少女に自らの手を取られ、元居た家に戻る。

そこで、藁が敷かれシーツが置かれていた場所に寝かされた後に、
服を脱がされ血が染み出ていた包帯を取られて、水に濡らされたタ
オルのような物で拭かれた。

「ッ！」

「あ、す、すみません。やっぱり染みますか？」

「……大丈夫、続けて構わない」

「……はい」

傷口を拭かれ、もう一枚の用意されていた綺麗なタオルで拭かれた
後に何かを塗られていた包帯を巻かれた。

「はい、これで大丈夫です」

背中から聞こえた声と共に作業が終わったのか、血に濡れた包帯や薬のような物を片付け始める彼女。

礼を言おうと思ったが、よく思い返せば私は彼女の名前を知らない。

「ありがとう、それで貴女の名前は？」

「わ、私の名前ですか……ティアラって言います。

えっと、そ、それで、おか、アナタのお名前は何て言っんですか？」

私の名前。

「……分からない」

もう一度だけ、思い出す努力をした後に彼女に向かってそう言う。

「……え？」

片付けていた手を止め、私を見るティアラ。

「私には自分の名前も過去も経歴も何もかも分からない。だから、教えて欲しい。

どうして私がここにいるのかを」

「そ、それってもしかして」

「ティアラさんの想像は合っている。

私には「助けられる前」の記憶が無い。

たぶん、記憶喪失だと思う」

私には分からなかった。

彼女の声を聞く前の自分が。

「つまり、森で血塗れになって倒れていた私を貴女は助けたという事？」

「はい、呻き声が聞こえて見にいつてみたら、アナタが倒れていて急いでこの家に連れ帰って、治療をしました」

私の名前を知らないという辺りで既に検討はついていたが、やはりテイエラも私の過去を知らないらしい。

知っているのは森の中で血塗れで倒れていたという事だけ。

その時点で碌な人では無いと分かりそうな物なのに彼女はお人よしだ、それで助かった私が言っではいけない事だが。

……しかし、それだと大量失血のショック症状が記憶を飛ばしたという説が今の所は正しいのだろう。

幸運なのは飛んだのは記憶のみだった事か、こうやって喋る事や考ええる事が出来る辺り知識の方は失っていない。

私は思考をそこまで纏めた後に上半身だけ起き上がっていた状態から姿勢を直し、テイエラに再び頭を下げる。

「テイエラさん、本当にありがとうございます。」

貴女のお陰で私は今、生きる事が出来ている」

「あ、いえ、当然の事をしただけですから。」

それに、施した処置も仕事の延長みたいな物ですし」

ちょっと後ろに仰け反って、彼女は両手を胸の前で左右に振っていた。

それでも、私は頭を下げ続ける。
彼女がいなければ、私は確実に死んでいる所だったのだ。
幾ら感謝しても、し足りるという事はないだろう。

「でも、本当に感謝しているから。

ありがとう、助けてくれて」

「……分かりました。

そう感謝をしているのなら、今度からは勝手に出歩かないで下さいね。

心配してしまいますから」

「分かった」

私はそう言った後に再び、横になる。

世話になっていているのだから、なるべく早く完全に動けるようにするのが出来るお礼の一つだろう。

「では、また夜に來ます。

その時は軽く食べられる物を持って來ますから。

おやすみなさい、………」

最後に彼女が言った言葉を聞く前に私の意識は再び闇へと落ちていった。

「痛ッ!!」

穏やかな睡眠の最中に襲ってきた唐突な痛みを意識が一気に浮上す

る。
軀を動かせるようになった事で跳ね飛ばしてしまったのか、余計に全身が痛い。

ズキズキと響く痛みで顔を顰めながら、半身だけ起き上がり周囲の状況を確認する。

見た所、またティエラは来てはいないらしい。

囲炉裏の火だけが光源となって、寂しく家を照らしている。

よく考えてみれば、この家を彼女が住居しているかも怪しい。

少女と呼べるような年齢なのだ、彼女は。

親や兄弟、農村なればそれこそ十人を超えていてもおかしくは無い。この家の物を見ても、そんな大量の人が住んでいるようには見えないのだ。

もしかしたら、ここは私のようなよそ者を置く為の（隔離）小屋なのかも知れない。

「…ツウ……い……痛ッ！……」

軀全体にジンジンと響きわたる痛み。

一体、どんな怪我をすればこのような痛みになるのだ？

刀傷というよりも、全身が擦り切れていたというのが正しい気がする。

そうになると、「記憶を失う前の私」はどうしてそんな傷を負ったのかだか。

どこからか裸同然と転がり落ちていかなければ、こつも全身に傷は広がらない。

なぜ、このような傷を私は負ってしまったのだろうか？

痛みを忘れる為に思考に没頭していると、いつの間にか入り口の扉が開きティエラがやって来ていた。

「調子はどうですか？」

「まだ痛みはあるけど、最初の頃に比べればだいぶ楽にはなっている」

私がそう言っていると、彼女はぱあっと笑顔を浮かべて両手を胸の前で合わせる

「それは良かったです。」

でも、まだ無茶は禁物ですからね。

じゃあ、ちよっと待っていて下さい。

今から夕食の準備を始めますから」

ティエラは言った後に何かの作業を始めた。

首を動かして見ていると、彼女は棚に向かい米のような物を取り出して、木で出来た桶を外に持っていく。

数分の後に彼女は帰ってきて桶の中には満杯の水が汲まれていた。

「~~~~~」

その桶を置くと彼女は歌を歌いながら、囲炉裏にかけられていた鍋の中に米（茶色だったので玄米）を入れると煎り始める。

「ティエラさん、その歌。」

この前も歌っていたけど」

「ティエラって呼び捨てでいいですよ。」

えっと、今歌っていた歌の事ですか？」

私は一度、首を首肯させて後に言う。

「その歌、なぜか懐かしく感じるから」

「有名な歌ですからね。」

以前に聞いた事があるのだと思います。

曲名は昔の言葉で、「こんにちは、お母さん」。

お母さんが子供を寝かしつける時に歌う子守唄なんです。

私の場合、昔に聞いていたのが耳から離れなくなっちゃって。

つつい、無意識で歌っちゃうんですよ」

苦笑いをしながら、そう私に言うティエラ。

その目にはなぜか、私に対する言い知れない不思議な感情を秘めていた。

「……………もしかして、迷惑でしたか？」

「違う、迷惑じゃない。」

むしろ、ティエラその歌を聞いていると、落ち着くから」

「分かりました……………」

彼女は歌いながら料理を続けていく。

鍋の中から独特の香ばしい匂いが漂ってきた辺りで水を入れ蓋を閉めた。

玄米粥か。

彼女の手元にある草と胡麻、塩が入っているらしい小さな瓶を見る限り、私の予測は正解だろう。

蒸らしには一時間は必要だから、その間に気になった事を聞いておこう。

「ティエラ。」

質問をしてもいい？」

「はい、何ですか？」

火をじっと見つめていたティエラはこっちに振りむく。

「ここはティエラの家？」

「ええ、そうですよ。」

サンタナの村にある私の家です」

サンタナというのか、ここは。

ティエラという名前からスペイン系だと思っていたが、サンタナ。
スペイン語っぽい聞いた事が無い、でもサンタアナなら。

いや、待て私。

さつきに自然に思い浮かべたスペイン、地球とは何だ？

思い返せばさつきから自分の考えている知識の整合性がまったく取れていない。

知っているのに知らない、そんな知識ばかり。

「スペインというのをティエラは知っている？」

「？」

彼女は私の言った言葉に小首を傾げると言う。

「ごめんなさい、分かりません。」

もしかして、記憶に関しての事なんですか？」

「そうだけど、ちょっと頭に過ぎっただけの言葉だから気にしなくて良い」

深く考え込むと、また頭痛が来るから止めておこう。
体調が治ったら、じっくりと考えればいい。

しかし、次の質問（彼女の家族について）はどうするか。

母親が歌っていた子守唄を知っている辺り、孤児という事はなさそうだけだ。

「……………聞くのは止めておこう。」

知り合って一日にも満たない私が土足で踏み入れていい話題ではない。

「最後に一つ、私は後どのくらいの時間を寝ていたら動いても良いの？」

「それはその日毎の様子を見て決めます。」

一応、明日の朝市に村長さんが来るので。

もし外を出歩くのならその挨拶をしてからになりますけど。」

村長か。

農村という閉鎖環境を考えると、余所者で厄介者であろう私に良い印象は持っていないだろう。

最悪、明日にはこの村を追い出される事を覚悟しておいた方がいいかも知れない。

彼女は見ず知らず私を助ける良い人らしいが、村の総意ではない可能性は十分にある。

意識が目覚めた今になれば、自分達の食い扶持を減らしてしまう私を追い出すという決断を下す事は十分にありえるのだ。

「……………良く分かった、ありがとう。」

「はい、また何か聞きたい事があれば何でも言っして下さい。」

その言葉で私達の会話は終わり、家には鍋が煮える音だけが聞こえ始めた。

家の外からも音は何も聞こえず、無音の空間が出来る。

しかし、それは雰囲気が悪くなって出来る居心地の悪い沈黙ではなく、穏やかな静寂。

自分でも不思議だが、彼女と一緒にいるとなぜか落ち着き、心が穏やかになるのだ。

ティエラも同じなのか、初対面に近い筈なのに「どこか見慣れた」自然体で落ち着いていた。

時折、鍋を思い出したように鍋をかき混ぜては火を眺め続けている。私は揺れる彼女の背中を眺め続けていた。

そんな穏やかな時間というのはあつという間に過ぎていき、白い湯気が上がる鍋の中に彼女が草と胡麻、塩を入れて味付けをすると、木の器によそって私の元に近づいてきた。

「これ、クレマ粥ですが、どうぞ」

そう言つて、どう見ても玄米粥に見えないそれを木の匙で掬つて私の口に近づけて来る。

好意に甘えて、口を開けるとそおつと舌の上に程良い暖かさの粥が落ちた。

「想像していた」通りの味。

素朴ながらも、キチンとお米の旨みを感じられる温かみがある味だ。

「……口に合いましたか？」

「大丈夫、とても美味しいから」

「良かったあ。」

もっとありますから好きなだけ食べて下さいね」

そう言つて二杯目を私の口に近づけてくる彼女。

自分で思っていたより空腹を感じていて満足した躰の反応に、また口を開けて食べようとしたが、気になる事があり彼女に問う。

「ティエラは食べなくて良いの？」

「私は大丈夫です。」

家に帰る前に食べてきましたから」

そう答えて、私に匙を近づける彼女。

しかし、あくまで感としか言い様が無いが、彼女は食べていないと

「私」は確信をしてしまった。

「本当？」

「嘘をつく必要がどこにあるんですか？」

そんな心配をする必要はありませんよ。

沢山食べて、早く元気になって下さい」

そう言って笑う彼女。

なぜか猛烈な苛立ちを覚える。

どうして、この「子」に無理を「私」がさせているのだろう、と。

そして私は無意識の内に口と手が動いてしまった。

匙を口に入れ中身を飲み込んだ後に、痛みを顔に出さないようにしながら彼女が持っていた匙を取って、器の中身を掬って彼女の口元に持っていく

「一緒に食べましょう、ティエラ」

「え、あ、え？」

「これだけの量を一人で食べるのは無理だから、ね？」

貴女が作ったのだし、一口も食べないというのは勿体ないと思うの」

ティエラは私を呆然とした表情で見ている。

正直、行動した自分でも驚き、呆然としている。

どこか片言だった言葉がいきなりはつきりとした発音の女性言葉に

なって私の口から「ほぼ無意識」で出たのだ。
記憶といい、知識といい、初対面の筈のティエラに対する胸に湧き
上がる感情といい、分からない。

その後には彼女は、またあの訳が分からない不思議な感情の籠った目
で私を見ると、笑顔になって言う。

「なら……私も一口だけ頂きますね」

そう言うと、口を開けたので匙を入れて粥を入れた。
味わうようにモグモグと咀嚼をすると、後に彼女は私の手から匙を
受け取り、粥を掬うと私の口に持って来る。

それを最初にしたように口を開けて受け入れる。

終わると次には自然に私が匙を取って彼女の口にお粥を入れた。

……いや、私は何をしているのだろう。

なぜに非効率的で面倒くさい食べさせあいをしているのだ？

しかし、されているティエラは妙に嬉しそうだし、今更普通に食べ
ようとは言えない雰囲気がある。

彼女が喜んでいるのなら、無理に止める必要は無いか。

だが、この今の行為に対する妙な既知感は何だろう？

目の前で口を広げて物を食べる彼女に姿に何か小さい人影が「重な
って」見えているのだ。

解決出来ない疑問を頭に浮かべたまま、私たちは鍋に入っていた全
ての粥を食べさせあってしまった。

「まだ、お腹が減っているのなら、お代わりを作りますけど？」

「いい、もうお腹は一杯だから」

私は再び抑揚が無い片言になった言葉でそう言うと、手に持っていた匙を彼女に渡す。

それを彼女は鍋に入れて、外に出かけていく。洗い物か。

出来れば私も手伝って上げたいが、この躰の調子だとむしろ彼女の仕事量を増やしてしまうだろう。

病人は病人らしく寝ていた方がいい。

そこで、沸きあがってくる疑問が一つ。

彼女はどこで寝るつもりなのだろうか？

寝台のような物は私が寝ている物しかないし、もしかして彼女は木の固い地べたに寝るつもりなのかも知れない。

編みこんだ藁が敷いてあるとはいえ、彼女を寝かせる事になるのは抵抗感がかなりあるのだけだ。

「ん？どうかしましたか？」

水で洗ったらしい鍋や調理に使った器具を持ち、家に入って来た彼女と目が合い、尋ねられた。

「ティエラ、貴女はどこで寝るの？」

「私ですか？あそこで寝るつもりですけど」

そう言って指差した先にあるのは積み重なった藁の山。確かに固い床よりは、柔らかかそうだけだ。

「この寝台、広いし一緒に寝れると思う。」

私の寝相は悪くは無いから」

そう、この寝台、妙に広い。

人が二人程度なら余裕で寝る事が出来るぐらいに広いのだ。

寝台の形に整えられた藁の上にはリネンのシーツを被せて、その上にさらに中に羊毛を詰めたシーツを掛け布団としている農民の暮らしにしてはかなり豪華な物。

彼女は小柄そうだし、このベッドなら二人で寝ても（寝相が余程悪くなければ）大丈夫だろう。

「……気持ちは嬉しいですが、気にしなくて大丈夫ですよ。

それに、寝ている最中に傷に触れてしまう可能性もありますし。

まだ、私はこれからしなくちゃいけない事がありますから」

そう言ったティエラは部屋の片隅にあった草が沢山置かれている作業台らしき場所に行く。

机の上に置かれていた蜜蝋の火を付けると、薬草をすり始めていた。

「薬を作っているの？」

「はい、そうです。

一応、私は呪術医なんですけど、呪力が弱いから薬を使って増幅しないといけないんですよ」

そう言つて、小さな棚から色々な草を取り出しては石臼でひき潰して粉にしていく。

芍薬、熟地黄、当帰、川？。

疲労回復薬でもあり増血剤である「四物湯」の材料だ。

この知識があるという事は、記憶を失う前の私は彼女みたいな「呪術医」だったのか？

いや、違う。

彼女が言っている呪力なんて存在に私の頭が反応していない。

呪力なんて物を「私」は初めて聞いたのだ。

知識を探っても、あの薬が「漢方薬」という意味の分からない存在の中のひとつという事しか分からない。

私はテイエラが真剣な顔で薬を作り続けている光景を眺めながら、次々と湧き上がって来る知識と格闘をし続けていた。

第一話「名前」

「……………んう」

瞼が重い目を見開き、周りを見れば藁の壁に開けられた窓から光が差し込んでいた。

もう陽が昇っているらしい。

外からは鳥の鳴き声が聞こえている。

上半身だけ起こし、未だにはっきりとしない意識を目覚めさせながら、記憶を辿っていく。

昨日はずっとティエラの作業を眺め続けていて……………。

ああ、ティエラの作業で確認出来る自分の知識の把握している内に眠くなって、寝転がってからの記憶が無いから、そのまま直ぐに寝てしまったのだろう。

作業台の方に視線を動かすと、最後に見た記憶よりも沢山の薬が散乱している。

私が寝た後もかなり作業を続けていたらしい。

そしてティエラは机から崩れ落ちたかのように床に寝転がって寝ていた。

「……………」

顔は見えないが、疲れきったように爆睡しているであろう彼女
手には直前まで調合していたであろう草がしっかりと握られていた。

その姿には二つの複雑な感情が私に湧き上がる。
喜びと悲しみ。

満足気な彼女に喜びを覚え、疲労困憊している彼女に悲しみを覚えてしまうのだ。
分からない。

なぜ、私は彼女にこの感情を抱く？

命の恩人である事には確かに感謝の念を抱いているし、その分の強い感情を私は持っている。

しかし、この感情を抱くのはおかしい。

『保護欲』

私がティエラに向けて抱いているのはこの感情の名。
意識すればする程、自覚できてしまう。

どうしようもない程に彼女を守りたいのだ、私は。

守ってあげたい、甘やかして上げたい……泣いているティエラを『
自らの手』で抱きしめて上げたい。

彼女の姿を見てみると、そんな感情が隆起してくる。

しかしおかしい。今の状況から考えると、むしろ保護されているのは私だ。

なのに、なぜ私が彼女を保護したいと思っている？

私には理解できない、自分の感情が。

故に目の前の寝ている存在に対して、恐怖と疑惑を覚えてしまう。
見ず知らずといった私にこのような感情を抱かせる存在であるという恐怖。

そして何か隠しているんじゃないかと思う疑惑。

記憶という自己の証明を失った私を騙す事なんて簡単な事なのだから。

「……………ッ」

痛みを感じるようにわざと頭を強く振る。

私は一体何を考えていた？

弱いというか、脆いというか。

記憶を失い、弱気になっているらしい。

他人、しかも恩人に責任を押し付けようとするなんて、なんて脆弱。

気持ちを切り替え、寝台から立ち上がると床の木の音を鳴らさないように慎重にティエラに近づいた。

顔を見れば、床に押し当てていたのかくつきりと藁の跡が付いている。

服も寝返りを打っていたのか所どころがはだけていたり。

とりあえず、握りつぶしてしまいそうだった薬草を手から抜き取って机の上に置いておく。

さて、どうするか。

今日は村長が来ると言っていたし、一番良い選択肢はこのまま起こす事だと思いが、疲れきって気持ち良さそうに寝ているティエラを眠りから覚まさせるのは抵抗がある。

…………… やっぱり寝かせておこう。

対談はその気になれば私一人で出来るだろうし、疲れている彼女を無理に起こす必要は無い。

自分が寝ていた寝台から掛け布団を取ってきて、ゆっくりと掛ける。力があれば、彼女を寝台まで運びたいが、今の力だと引き摺るくらいしか運ぶ方法が無い。

そんな事をしてしまえば、痛みを伴って彼女は睡眠から強制的に起こされてしまう、
本末転倒もいい所だ。

「後は、昨日の確認」

ぼそつとそう呟いた後に、彼女が座っていた場所に座り作業台に置かれた薬を確認していく。
自分の訳の分からない知識の確認の為に、テイエラには悪いが薬を見させて貰おう。

作業代の上には材料棚と様々な器具、そして薬を入れた陶器の小瓶がある。

その陶器の小瓶を確認して、昨日の記憶と照らし合わせていくと、次々と出てくる名前と効能。

昨日の最初に作られていた四物湯は当然として、桂枝湯、加味帰脾湯、当帰芍薬散、茯苓飲。

日常生活において、どれもが役立つ効能を持っている薬だ。

しかし、どれを見ても昨日に彼女が言っていた「呪力」という知識は出てこない。

全てがあくまで飲んだり塗ったりと「普通」に使う事で効果を発揮するとして私は知らないのだ。

やはり、私は呪術医では無いのか？

しかし、薬学に対する豊富？な知識がある事を考えると無関係で無いとも言いきれない。

一応、材料棚も開けて、中を確かめていく。

そこには芍薬、甘草、麻黄が入っている。

そして一番下にある他の物とは違う装飾がなされた引き出しを開け

た。

「……こんな物まで」

一番下の引き出しにあったのはコカの乾燥した葉。

麻薬であり、麻酔薬でもあるコカインを生み出す原料。

他にも劇薬になりうる大麻、生アヘン等が詰まっていた
歯を抜く時の麻酔として使っているのかも知れない。

昨日に使った様子は無いし、違う装飾がなされているから危険性も
把握しているのだろう。

「……………」

包帯が巻かれ震えている手がその引き出しに伸びる。

正直、コカの葉は一枚欲しい。

今に村長が来て村から追い出されたら生きる為には別の場所、街か
森に行かなければならないのだ。

その場合、痛みを忘れさせ、空腹感を消し、気分を高揚させるコカ
の葉を噛んでおけばかなり楽になる。

「……………さん」

「ッ！？」

もう少しで葉を掴みそうだった躰がその言葉と伝わってきた感触で
震えた。

急いで見ると、隣で寝ていたティエラが私の服を握って擦り寄って
きていたらしい。

服を手で握り締めて、少し微笑んでいる顔を脚に押し付けている。

「……………屑」

そう、屑だ、私は。

人が寝ている時に物を盗むなんて。

ましてや恩人の物を。

コカの葉は基本的に熱帯地方にしか生えないし、別の地方から取り寄せたんだとしたら高級品、効果を考えれば最高級と考えてもいいぐらいだ。

それを勝手に盗むのは恩を仇で返す事になる

開けてしまった引き出しを元に戻す。

それが終わると、私はティエラの頭の自分の足の上に乗せた。硬くザラザラとした床よりかは、ましだろう。

「……ごめんなさい」

そう、まだ目を瞑って眠る彼女の頭を撫でながら言う。

もう、死ぬ時は死ぬしかない。

見苦しい真似をするのは止そう。

この家で初めての笑みを浮かべながら、私は達観した表情で彼女の頭を撫で続けていた。

頭を撫で続けて、どれ程の時間が経っていたのか分からない。

数分かもしれないし、数時間もかもしれないが、あつという間にそれは来た。

「ティエラの嬢ちゃん、ちよいと失礼すッ!？」

この家に入って来ようとしたのは、初老とは言いすぎだがそれなりに年を経た一人の男。

四十台後半ぐらいで、ティエラと似たような民族衣装を身に纏い、衰えてはいるが服越しでも力強さが分かる男だった。

この人が村長か。

精悍で頼りになりそうな顔立ちの中にも優しさも混じっており人の上に立つ人物として申し分ない。

しかしなぜか、入って来てこっちを見た瞬間に固まってしまっている。

大声を出して彼女を起こされては問題なので、指を口に当てて静かにするように仕草を出しティエラに視線を向ける。

村長も私の視線を追って、彼女がぐっすりと寝ている事に気がついたのか、固まっていた状態から一度、首肯して、慎重にこっちに来る。

「起こしちまっていないか？」

近くに座り、小声で私に問う。

「大丈夫、起きていない」

って、しまった。

また片言で喋ってしまった。

昨日は喉の調子が悪かったから、抑揚が無い必要最低限の片言で喋っていたが。

今は大丈夫だから。

「大丈夫です、起きてはいません」

「お前さん、一回言わなくても分かるぞ」

一応、敬語で言い直したつもりだったのだが最初の失礼な言葉は気にしていなかったらしい。

「彼女は昨日遅くまで薬を作っていたから、寝かしておいてあげたのですが」

「こっちもそうさ、ここへ来た用はお前さんに対するもんだからな。嬢ちゃんを起こす必要はない」

私の目を見て、そう言う村長。

そして視線を外して、外の方に向ける。

つまりティエラがない場所に行って話そうという事か。

「分かりました」

頷いた後に小声で言うと、ゆっくりとティエラの頭を膝から下ろして立ち上がる。

しかし、まだ完全に回復していない所為もあり足元がおぼつかなく倒れかけてしまった。

「おっと、大丈夫か？」

「ッ……ありがとうございます」

そんな私を抱きとめて支えてくれる村長。

痛みは走ったが、予想していた衝撃よりも少ない。

こっちの身を気遣ってくれたつもりか、ティエラを起こさないように配慮したのか分からないが助かった。

「俺の肩に手を回せ。」

その足だと一人でまともに歩くのは無理だろう、お前さんは
「本当にありがとうございます」

私はそう言った後に彼の肩に手を回し、助けて貰いながら外に向けて歩いていった。

「それでお前さんの名前は、ってすまん、すまん。確か記憶が無い
んだっとな」

外に出た私達は家の側面の日陰にあつた丸太に座り、目の前に広がる
うっそうとした森を見ながら話を始めていた。

「気にしないで下さい、むしろ迷惑をかけているのはこっちです
から」

「まあ、そうだな」

正直というか、単刀直入で邪魔だという事を伝えて来た。

やはり、外に出してこんな場所で話を始めたのはこのまま追いつ
か、殺すつもりがあるからなのかもしれない。

「おいおい、そんな諦めきつたような表情はしないでくれ。

お前さんを今すぐどうこうするつもりはこっちにはないさ。

とりあえず、その傷が癒えるまでは何も気にせずに治療に集中して
過ごしてくれて構わん」

言っている事が矛盾している。

邪魔だと宣言した相手にする行いではない。

「私の事は邪魔では無いのですか？」

「勿論、普通に考えれば邪魔だ。」

俺らと同じ『森の民』でもなけりや、傷だらけで俺の肩を掴まなきや歩けない奴なんだぞ、お前さんは。

そんな奴が村にとって邪魔じゃない訳がないだろ？」

だから、それは矛盾だらけの言葉なのだけど。

邪魔ならば、なぜ保護しようとする？

そもそも『森の民』とは何なんだ？

「ならば、なぜ私を保護するのですか？」

今ここで村から追い出すか、もしくは殺す。それが貴方達によって一番良い方法でしょう。

しかし貴方達は私を傷が癒えるまでここに居ていいと言う、さらに傷が癒えるまで面倒を見ると。

それはどうしてなんです？」

私は素直に疑問を問いかける。

彼らの思想は私には理解できて、納得も出来る。しかし、行動だけは理解できない。

「そこまで分かって付いてきていたのか、お前さん。中々肝が座っているねえ。」

……それとも、分かってやっているのか」

少しだけ感心したように、そして疑惑の感情を込めて村長は言う。

「何が分かっているのか分からないですが。」

それはおそらく、あの子、ティエラに関わる事が原因ですよね？」

行動は理解できないが、その原因は何となく分かっている。

ティエラだ。

私に不思議な感情を向けて、なぜか私も不思議な感情を抱いているあの子。

「……そうだ。

お前さんは村から追い出しなんかすれば、あの子は村を捨ててついでいくだろう。

殺せば俺達の事を今度こそ絶対に許さない。

それにそんな事が無くとも、俺達はお前さんを再び見殺しにするなんて事は出来ねえんだよ」

ますます分からない、ティエラも原因だが私にも原因がある？
というか、再びとは何だ？

「それはどういう事なんですか？

私はこの森の中で傷だらけで倒れていた、見ず知らずの余所者なんでしょう？」

私を詰め寄って問いかける。

そこに私の記憶の鍵がありそうだから。

「ああ、それはお前さんが言う通りであってる。

お前さんは俺達にとってはまったく知らない赤の他人だ。
だがな、その姿は知っている」

私の姿？

「今のお前さんの姿はな、二年前に死んだティエラの嬢ちゃんの母親の姿とそっくりなんだよ。最初に見た時はハライソから戻ってきたんじゃないかと思った程によく似ている」

ティエラの母親に似ている？

私が？

妙に納得してしまう自分が怖い。

母親であるならば、彼女に向ける保護欲も分かるし、ティエラが私に向ける不思議な感情も納得出来てしまう。

しかし、その母親はもう死んでいると村長は言っている。

「その母親が死んだというのは確認されているんですよね？
行方不明という形で死んだという事は？」

「無い、遺体は俺達の手で焼いて、遺灰は嬢ちゃん自身が墓に埋めた。」

それにお前さんは『無の民』であの人は『森の民』だ。

だから、俺はお前さんがあの人とは別人だと分かっているし、理解している」

村長はティエラの母親と私を同一視をしないという事か。

しかし、村人の中には私の事をそのティエラの母親と同一視している人がいると暗に言っているのだろう。

それ以前に『無の民』とか『森の民』の区別が私には分からないのだが。

村長は一呼吸をした後にため息を吐くように首をうなだれて喋る。

「だがな、ティエラの嬢ちゃんはそうは思っていない。

お前さんの事を死んだ自分の母親と思っている節がある。」

本当はお前さんとあの人は別人だと分かっていると思うんだがなあ。だけど、ココがそれを受け入れるのを拒否しちまってる」

自分の胸を指差してそういう村長。
つまり感情の問題という事か。

「彼女の父親は？」

彼女には聞けなかったが、気になっていた事。
まあ、半ば予想はついているが。

「本当の父親はいない。

そもそも、ティエラの嬢ちゃんが赤ん坊の頃にあの人は二人だけでこの村にやって来たんだ。

呪術医だったあの人と俺が交渉して、村でその力を役立てるのを交換条件に村に入って貰った」

つまり母子家庭という事か。

そして今は彼女が呪術医とやらをやっている以上、それを教わった師匠でもあるその母親は。

ティエラの中にある依存心というか思い入れはかなり強いだろう。

しかし、本当の父親とわざわざ言ったのだからこの別の父親がこの村にはいる筈だが。

「本当の父親と言ったという事は。

その人はこの村で結婚していたんですね？」

そう言うと、村長は苦虫を踏み潰したような顔をして、私から視線を外すと言う。

「……………ああ。俺と結婚していた。と言っても、必要だったからただで名目上の結婚だ。一緒に暮らしてもいかなかったし、そういう関係も感情もあの人と俺の間には無い。」

ティエラの嬢ちゃんもそういう認識を持っている。

だから、俺はそういう問題には突っ込めん」

「すいません、不躰な質問をしてしまって。それ以上はいいです」

これ以上はさすがに聞けない。

「……………すまねえな」

私から視線を外したまま、村長は頭を掻いてそう言う。

彼の言葉をそのまま全て信じるのなら、確かに色々辛いだろう。

「構いませんよ。」

事情は完璧では無いですが把握出来ましたから。

では、単刀直入に聞きます。

村の長、村長として貴方は私に何を求めますか？そして何を与えてくれますか」

私が聞き、知りたいのは村の総意。

こういう狭い共同体において、村長の決断はそのまま村の総意になる。

私を最終的には追い出すのか困り込むのか、どっちの方針を取るのか私は知りたい。

その言葉に少しビクツと跳ねた村長は目を細め、仏頂面とした顔を

緩めると私の目を覗き込むように見て言う。

「……本当に似ているねえ、お前さんは」

その村長の黒い光を放つ目に映るのは「私」の姿。

ティエラをそのまま成長させたような姿を持つ女性の姿があった。

年は二十台の後半で、長い黒髪、青白い皮膚。

ただ、ティエラが幾ら成長しても違つと断言できる点が二つある。

私の耳は彼らと違って短く、目の色が黄色、いや金色だった。

その瞳の中にはティエラと同じ黒い瞳を持つ、村長の姿が鏡のように映っている。

「村の総意としては、どつちでも構わない。

お前さんの好きにしたらいいさ。

自分で出て行くのなら、ティエラの嬢ちゃんを連れていかなければ何も文句は言わねえし、言わせねえよ。

だが残るのなら、村の一員として働いて貰う必要がある。

今の時代、貴族でもない俺達は働かねえ奴に食わすのは無理だからな。

体調が回復したら食い扶持分は色々と手伝つて貰う、それは村の女としてもだ」

本当に嘘が嫌いな人らしい、村長は。

個人的にはかなり好感を抱ける相手だ。

一々、誤魔化されたりするよりかはこう正直に言つて貰つた方がありがたい。

さて、どうするか。

さっくりと追い出されて野垂れ死にするか、ここで殺されるかを覚悟してただけあって、何も考えていなかった。

保留はティエラの事を考えると出来ない、出て行くのなら先に言っていた方が良い。
傷が完治して、いきなり出て行きますなんて言うのは彼女の気持ちを考えるに裏切りにも程がある。

……………残ろう。

外に行き、自分の正体を探したいがそれ以上にティエラの事が気がかりだ。

私の正体だって、ティエラを見ると湧き上がるこの感情や容姿の事を考えると彼女の近くにいた方が良い気がする。

あくまで感にしか過ぎないが、ティエラの母親と私は何か接点があると確信があるのだ。

それに外に出た所で食べる事が出来ずに野垂れ死にする可能性が高い。

私は村長に向かって頭を下げると言う。

「村長、私をこの村に置いて頂けませんか？」

彼は頷くと、私の肩に手をかけて言う。

「……………分かった、お前さんをこのサンタナの村の一員として迎え入れる。

お前は既に俺達の村の一員だ、つまり家族も同然という訳だ、だから頭を上げてくれ。

家族に頭を何時までも下げさす趣味はねえからな」

そう言われた私は頭を上げる。

村長は顎を手で触りながら言う。

「とりあえず、しばらくはティエラの嬢ちゃんと住んでくれ。とにかくにもその傷の治癒が最優先だ」

「分かりました」

確かにこの傷が癒えない事には何も出来ない。

「おっと、そうだ、一つお前さんに決めて貰わなくちゃいけない事がある。

名前だ、名前。

二人の時はお前さんって呼べばいいが、三人だと名前があった方が便利だからな」

名前、私の名前か。

「そうだな……………セリカ。

お前さんの名前はセリカでいいか？」

スペイン語で「天空」。

いや、だからスペイン語とは何だろう？

聞いても分からないそうだし、聞く事はしないが。

「天空ですか？」

「ほう……………お前さん、よく知っていたなあ。

その通りだ、古代語で天空という意味がある」

スペイン語ではなく、古代語？

スペインは昔という意味を持つ言葉なのか？

「ティエラは「大地」、それとも「故郷」でしたよね？」

テイエラには理解出来ない「地球」という意味もあったが、その他に意味が分かる「故郷」や「大地」という意味もあった筈だ。ようは「大地」、「故郷」を「天空」から見守れという意味を含めたのだらう、この村長は。

それを考えるとテイエラを自分の家に引き取らずわざわざ、この家に残している辺り……。

村長はテイエラの母親との結婚を張りぼてだと言っているが、実は案外、愛していたのかも知れない。

「ッ!!……本当にお前さん、ハライソから戻って来たあの人じゃねえよな?」

「分かりません、私には記憶が無いですから。」

……ただ。本当に良い男であり夫だったと思いますよ、貴方は」

私がそう微笑んで言うと、村長は頭を掻きむしりながら立ち上がった。

「……むしろ最悪の夫だったと思うがね、セリカ。

つと、今日はまだ体調が悪いのにわざわざ外に連れ出して長話につき合わせてしまったって悪かったな。

しばらくはゆっくりと休んでくれ、体調が良くなったらまた来る」

そう言って私の手を持ち、肩を掴ませる彼に私は声を掛ける。

「村長、最後にもう一つ聞いていいですか?」

「何だ?」

一緒に歩きながら、答える村長。

「貴方の名前と、ティエラの母親の名前を教えてください」

「それだと二つだが、まあいい、今日は特別だ。」

俺の名前はホーキン、あの人の名前はベアトリスだ」

ホーキンは知識に引っかけられなかったが、ベアトリスは分かる。

ラテン語で「幸福」。

「幸福」から生まれた「故郷」か。

ベアトリスは何を思っ、その名を付けたのだろうか？

「そうですね、ありがとうございます。ホーキン村長」

そうして無言となって私達は再び家に戻っていった。

そして勿論、起きていたティエラから二人揃って物凄く怒られた。

第一話「名前」（後書き）

名前に意味を持たせよう計画進行中。

勿論、村の名前も村長の名前も元ネタが存在します。

それと改訂は一週間はし続けると思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2988z/>

アナテマの母

2011年12月14日00時52分発行